

## 水出しの茶と、当たり前前の明日

茶とは、

たおやかで、奥深く、柔和で、鮮明なものである。

太古から存在し続け、その複雑で凜とした姿で、私たちを惹きつけて離さない。

一方人生とは、

揺らぎ、浅はかで、頑なで、曖昧なものである。

四半世紀生きてなお私は、自分の在り方すら解らない。

増えてばかりゆく知識と、肥大していく自意識。

自分だけは他と違うんだという、不安定な自信に似た何か。

画面の向こうの誰かとの比較で、増えていく劣等感。

常識、価値、存在意義、努力、才能、アイデンティティ。

雑音が、常に頭を支配する。

やりたかったこと、成し遂げなかったこと、突き詰めたかったこと。

それらからの逃避で、毎日が忙しい、

過ぎてしまった時間への後悔。

こうあったはずの未来の妄想と、現実の虚しさ。

無邪気な幼少期の自分への罪悪感。

行き所のない感情が、少しずつ、私の中で膨らんでいく。

やがて何もできなくなった。

私は明日を手放そうとした。

私の視界に、ガラスのボトルが映った。

夏の習慣だった、一晩寝かせてつくる水出しの日本茶だった。

「明日、飲むでしょ」

無意識に今夜も仕込んでいた、明日完成される日本茶。

まだほとんど透明に近い薄緑のそれは、私に語りかけてくる。  
さも当たり前のように。  
当たり前前のように。  
当たり前前のように。

私が眠っている間、茶葉はゆっくりと水に心を許し、溶け込んでいく。  
それはそれはじっくりと、時間をかけて。

もし、もしも彼らに意識があったとして、この夜の間、何を思うのだろうか。  
故郷の景色だろうか。

優しい造り手の指先の温度だろうか。  
仲間たちとの少しの間の眠りの心地よさだろうか。  
そんなことを考えながら、気づくと私は眠りについっていた。

当たり前前のように朝は来た。

まだ薄暗い部屋の中で、冷蔵庫を開け、ボトルを取り出す。  
朝日が窓越しに差し込んで、茶は黄色のような金色のような不思議な色を放っていた。  
コップに注ぐと、控えめな、けれども凜とした奥深い香りが辺りに広がる。  
茶は乾いた喉を伝って、私の身体にすっと入ってきた。  
すつかりと出来上がった水出しの茶が、私の身体を潤す。  
そして私は、今日を迎えた。

曖昧な日々は続く。

先の見えない暗闇も、葛藤も、後悔も、無気力も、まだ終わらない。  
けれど私は決まって夜、水出しの茶を仕込むのだ。  
当たり前前のように、明日を迎えるために。